

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

89

(鈍刀と名作)

ロシアの作家ドストエフスキの論評、本居宣長の論評など昭和の時代に、日本の評論の世界を築いた小林秀雄は、吉田兼好の「徒然草」を「鈍刀を使って彫られた名作」と讃えている。「花は盛りには月は隈なきをのみ、見るものかは」この言葉を現代科学の言葉で解釈するなら、時空の科学を文学として捉えたものといえる。それは、丸くなった満月の美しさは、満月の前の月や、満月の後の欠けて行く月をみて、初めて美しさが感じられると言っているのである。まさに、現代科学と芸術の世界の言葉である。(鈍刀と名作)とは何を意味するのだろうか。

彫刻には切れる鬚が必要である。(鈍刀と名作)、これは一つの例えなのだろう。細部だけではなく、全体の像の出来栄えが大切なのだと言ったと思ふ。「梅下村塾」では、草の根の心や根性を取り上げてきた。東海新報の文芸欄の作品から、そこに潜んでいる歴史の記憶や魂を掘り起こそうとしてきた。大船渡第一中学校の生徒の短歌と俳句への評はその一つである。

大船渡短歌会、陸前高田短歌会の作品評も間もなく掲載されると思ふ。小林秀雄は江戸時代の国文学者の「本居宣長」に関する著述をして、本居宣長の古事記研究と短歌の関係に触れている。本居宣長は短歌を詠むのが大好きで、沢山の短歌を詠んだ。

本人の心の奥にある「もののあわれ」を突き詰めることを目指したとしている。精緻な歌詠の道を目指したのではなく、歌を詠むことそのものを目指したとしている。いわば、鈍刀で歌を詠み、歌の心を創り出したのである。

文芸評論家の橋本治氏は「小林秀雄の恵み」の著述で、源氏物語に触れて、源氏物語の世界を感じ取るには、源氏物語の中にある和歌を感じ取らねばならないと言っており、原文のままではその和歌を読むのは難しいとも言っている。要は、平安朝文学では敬語がふんだんに使われ、その中で、作中人物の心を知ることは難しい、しかし源氏物語の和歌を読めば、その心の奥にあるものが伝わってくるというのだ。

源氏物語は「地」であり、和歌は「心」というのだ。まさに、これは「梅下村塾」で述べてきている「ことばつなぎ」の世界である。草の根の「ことば」をつないで「気仙の心」を創ることである。

「東海文芸」を始めとする、東海新報の記事に大いに期待したい。

(植樹と復興)

3月6日(水)の第6面に「震災の思い新たに 桜ライン311」が植樹 陸前高田一げ掲載されている。苗木植樹は「東日本大震災による津波の到達点を桜でつなぎ、記憶を後世につたえるために」と一昨年から実施。同市内約170ヶ所にわたる津波到達ラインにおよそ1万5000本植えることを目標にし、今回で500本に達した。植樹は色々な記念行事に行われてきている。それは、ある出来事を記憶として残していくためである。

植樹による並木はまた、格別なものである。大震災の記憶、その復興、そこで一緒に生活した人々、他の場所に移った人々、苦勞を一緒にした人々、自然の姿、いろいろな記憶が甦ってきます。

植樹による並木はまた、格別なものである。大震災の記憶、その復興、そこで一緒に生活した人々、他の場所に移った人々、苦勞を一緒にした人々、自然の姿、いろいろな記憶が甦ってきます。

3月7日の世迷言では、近畿大学水産学部がマグロの完全養殖に成功したニュースを述べて、実学教育について触れながら、東日本大震災で三陸町から相模原本部キャンパスに避難したまま、未だ三陸町に帰還する予定が具体化していない北里大学海洋生命科学部について触れている。

北里大学は新しくボランティア社会学のコースを立ち上げた。このコースは国際保健学的視野と生命科学的視野とをつなぐ教育を指している。この教育が気仙地方で展開され、気仙地方文化の活性化につながることを期待している。

3月10日の毎日新聞の「メディア 時評 バチカン報道 幅広い視点望に 釈 徹宗 相愛大学教授(宗教学人間学)」で2月11日にローマ法王のベネデクト16世が退位したことへの論評が載っていた。

法王が存命中の退位は600年ぶりであるということである。これは世界の12億人のカトリック信者を擁するローマ法王庁が、21世紀でのカトリック界の新しい在り方をめざしていることと関係があるのではないかと見解であった。

伝統を越えての改革を目指していることにつながるという。北里大学がおかれた立場と気仙の立場の両方をつなぎ合わせ、お互いが協力して、この地球で生き抜くための新しい関係形成の構築を目指す時が来いていると思う。